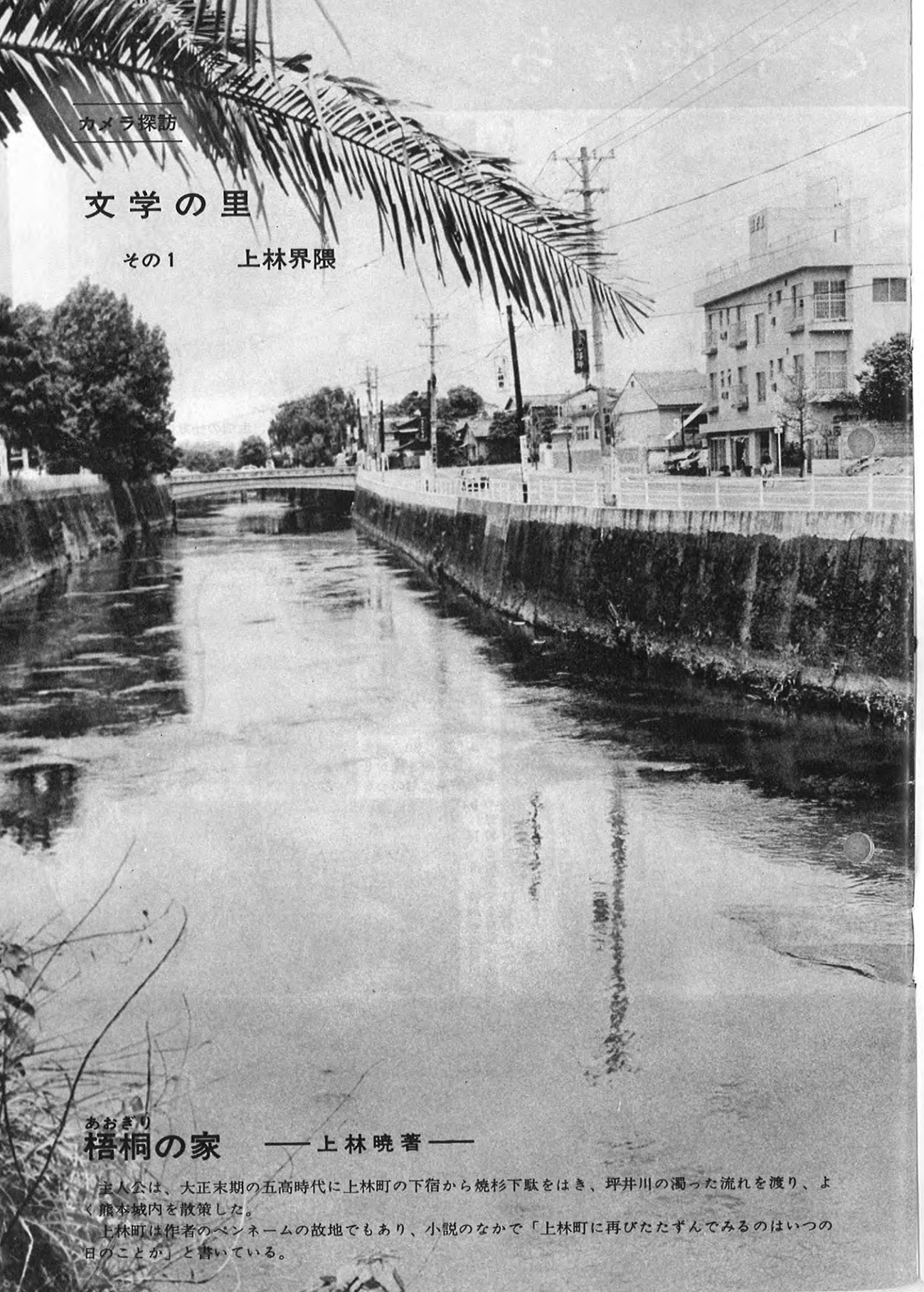
カメラ探訪

文学の里

その1　上林界隈



梧桐（あおぎり）の家　――上林暁著――

主人公は、大正末期の五高時代に上林町の下宿から焼杉下駄をはき、坪井川の濁った流れを渡り、よく熊本城内を散策した。

上林町は作者のペンネームの故地でもあり、小説のなかで「上林町に再びたたずんでみるのはいつの日のことか」と書いている。

わたしのぼくの郷

阿蘇郡南小国町立黒川小学校五年　井　祥香

私たちの町南小国は、美しい森林に囲まれ温泉にめぐまれた静かな町です。都会のように、公害がないので、空気は澄みきっています。

春の足音が近づいてくると、うぐいすが朝早くから鳴いています。だから私たちの朝は、うぐいすで目がさめるのです。

都会の人々に、この、うぐいすの鳴き声と、澄みきった空気を分けてあげたいと思います。

夏になると、裏山でせみが鳴き、虫取りあみを持って追いかけるのです。また、山に行くと、たくさんの木に「クワガタ」がいます。

それをとって、さとう水、すいかを、虫かごに入れてやります。

夕方になると、ひぐらしも鳴き出し、さびしくなって、仕事から帰る母を待ちます。

秋は、木の葉が、えのぐをぬったように赤黄色で山をかざります。

冬は山一面雪げしょうとなります。

兄と二人でかま倉、雪だるまをせっせと作ったこともあります。

こわれる時もあり、完成するまでの苦労や、楽しみは、これまた都会の人には、わからないだろうと思います。

ときどき、都会には、私たちの町のように美しい緑に、かこまれている所ってあるのだろうかと、つくづく考えさせられます。

この美しい自然の中で勉強できることが、どんなにか、しあわせです。

ですから、いつまでも、いつまでも、この自然をこわさないで、みんなといっしょに守っていきたいと思います。

都会のみなさん、一度、この私たちの町に空気のすみきった町に、来て見ませんか。